

読み書き支援のためのシンポジウム

これからの高齢者・障害者への情報支援を考える！

日時：平成 23 年 12 月 3 日（土）13 時～16 時 30 分

会場：仙台市福祉プラザ 2F ふれあいホール

入場無料 （会場は、仙台市五橋。仙台駅西口から南へ徒歩 10 分）

高齢者や障害者など、読み書きが困難な方々へ、どのようにして必要な情報を伝えるのか？ 東日本大震災等の災害は、本当に必要な情報すら伝わっていなかったことを明らかにしました。

「高齢者・障害者へ情報をどのように伝えるのか？」には技術も必要です。そして、情報を必要とする人のニーズと、どう結びつけるか？

新たな情報支援の取り組みのためのシンポジウムにぜひご参加ください。

主催：「読み書き支援のためのシンポジウム」実行委員会

後援（予定）：日本図書館協会、日本盲人福祉委員会

☆プログラム（予定）

13:00 開会挨拶

13:10 講演「大多数の視覚障害者に 必要な情報は何も伝わっていなかった」
原田 敦史氏（日本盲人福祉委員会 東日本大震災対策本部 現地責任者）

13:40 講演「高齢者・障害者への伝え方は どのようにしたらよいのか？」
加藤 俊和氏（元 京都ライトハウス情報ステーション所長）

14:30～14:40 休憩

14:40 シンポジウム

「必要な情報を高齢者・障害者に伝える読み書き支援とは？」

司会：加藤 俊和

シンポジスト：

阿部 直子氏（アイサポート仙台）
滝本 慶子氏（陸前高田市 音訳ボランティア）
伊藤 真己氏（仙台市 " ）
金野 トシ子氏（いわき市 " ）
松木 隆雄氏（那須塩原市 " ）
藤田 晶子氏（全国音訳ボランティアネットワーク）

16:30 閉会挨拶

問い合わせ先：「読み書き支援のためのシンポジウム」実行委員会連絡先

eメール：masamitsu@daikatsuji.co.jp 電話：080-4071-9402（市橋）

後援・シンポジウムの内容

講演「大多数の視覚障害者に必要な情報は 何も伝わっていなかった」

日本盲人福祉委員会 東日本大震災対策本部 現地責任者
原田敦史氏 プロフィール

愛知県名古屋出身 社会福祉士

平成7年3月東北福祉大学社会福祉福祉学部福祉心理学科卒
平成7年4月国立身体障害者リハビリテーションセンター就職。

函館視力障害者センター、神戸視力障害者センター
平成19年4月公益財団法人日本盲導犬協会 仙台訓練センター
平成23年8月同 リハビリテーション事業部マネージャー
(講演骨子)

今年3月に発生した東日本大震災で視覚障害者も多く被災をした。日本盲人福祉委員会支援対策本部では3月末から活動を開始し視覚障害者を支援した。活動当初の時期は、病院の開院状況やスーパー等の開店状況の情報がテロップとして地元テレビを中心に一日中流れていたが、音声化されておらず、多くの視覚障害者は生活に直結するこれらの情報に触れることが困難であった。またインターネットでの情報提供もあったが、写真やPDFの情報も多く、パソコンを使える人でもアクセスできないものも少なくなかった。

加えて、情報が切望されていた避難所では、手書きの人探しの案内や国・行政からのお知らせや支援状況などが印刷物で多く張り出されていた。これらも読んでくれる人がいないと必要な情報すら入手することができなかった。

対策本部では、初期の調査支援活動を終えた6月に、宮城県沿岸部に居住している1、2級の視覚障害者に対して、県と協力し対策本部の情報送付が実現した。受け取った約千人のうち400名から支援の希望の訴えが届いたが、この4割もの方々のほとんどがこれまで我々の関わっていなかった、というより何ら情報の届いていない人であった。災害時における視覚障害者への情報を伝える困難さを実感した一瞬でもあった。

これら多くのことは阪神大震災の時にも指摘されていたが、視覚情報ばかりになりがちな「災害時における情報伝達」を如何に解決していくのか、復興に向かう中で考えなければと思っている。

講演「高齢者・障害者への伝え方は どのようにしたらよいのか？」

元京都ライトハウス情報ステーション所長
加藤俊和氏 プロフィール

1945年3月、京都市出身 1961年からボランティア活動。

1968年、京都工芸繊維大学電気工学科卒。

立石電機(現オムロン)中央研究所。

1980年、(社福)日本ライトハウスで、情報、リハ等所長、常務理事を歴任。

2003年から2010年3月まで、「読み書き」事業草分けの

(社福)京都ライトハウス情報ステーション所長。

これまで、広島大学等非常勤講師、経産省高齢者障害者支援専門委員ほか。

現：日本盲人福祉委員会 東日本大震災視覚障害者支援対策本部 事務局長、ほか。

(講演骨子)

視覚障害者や高齢者にとっては、「健常者の豊富な情報」の多くが入手出来ない情報である。小さい文字、複雑なレイアウト、分かりやすいはずの図や表が理解できないなど、「健常者のための情報」の世界の中で、高齢者や中高年から視覚障害となった多くの方々は、得ていないといけない情報から阻害されている。

では「読み書き」の「読み」とはなにか。「明瞭な音声で読む」のは音訳と同じだが、見る情報の概略をすばやく把握し、「必要とされている部分だけを抽出して、相手が理解できたかを判断しながら的確に読む」ということ求められる。さらに、「ほぼ音声のみで伝えるしかない多くの高齢者や、中高年から視覚障害者にとっては、一度に聞いて覚えられるのはわずか2、3行分の内容だけ」という現実への対応が必要なのである。だからこそ、相手に分かりやすいのなら方言でもよく、「その資料の中の重要な、覚えられる範囲の情報だけを的確に伝える」という、音訳とは異なる技術が必要なのである。

また、「書き」については、契約書その他の内容確認や記入だけでなく、署名捺印までも委ねられることがあり、個人情報保護の知識は必須である。

シンポジウム 必要な情報を高齢者・障害者に伝える読み書き支援とは？

非常に多くの、高齢者や中高年から視覚障害者、読み書きが必要な方々のニーズをどうとらえるのか？そして、「必要とされている読み書き支援」といかに結び付けるか。東日本大震災等の災害の支援の中で、本当に必要な情報すら全く伝わっていないことが浮き彫りになっています。

仙台、陸前高田、石巻、いわき、那須塩原、そしてそれらを結び付けている、全国音訳ボランティアネットワーク…。各地でさまざまな活動をされているみなさまと、「読み書き支援」の活動について、共に考えていきたいと思っております。